

## 【Notes and Communications】

# 丸山 徹『アダム・スミス「国富論」を読む』 (岩波書店, 2011年)をめぐって

星 野 彰 男

日本の『国富論』研究史では、スミス生誕200周年(1923年)が一大画期だった。その頃、マルクス『剰余価値学説史』(1905年)が翻訳され、そのスミス価値論批判に伴ってスミス理論が急速に注目され始めた。中山伊知郎の均衡理論解釈(『スミス国富論』岩波書店, 1936年)のスミス価値論批判もマルクス援用だった。1940年代前半に独自の市民社会的理解が提起され、主にこれが戦後に受け継がれる。だが近年のマルクス主義の権威失墜により、改めて独自のスミス理解が志向されてきた。そのさなかに本書は、学界の意表を突いて——中山著の捲土重来を期するかのよう——現れた感がある。

本書の著者は屈指の数理経済学者だが、やさしく語りかける口調で、第四話のみ記号式を交えつつ、スミス思想に内在した概説書を世に問うた。第一話「アダム・スミスの時代」と第六話「自然と科学」からは著者の博識ぶりが窺えるが、その間の四話(二分業, 三 価格と競争, 四 成長, 五 重商主義の弾劾)が本題である。『国富論』(以下、「原典」と言う)の理論概説書は久し振りで、大いに歓迎されるべきことだ。しかも著者には専門外のこの原典の解説を、海外の主要関連文献(ヒックス, エルティス等)までフォローし、これらに応答して器用にこなしたのはさすがである。

本書の一特徴は、内外で権威づけられてきたリカードウ→マルクスのスミス論(実は誤解)にさほど囚われていないことだ。その点は評者著(2002, 2010年)と共通し、研究史上での一転回を画している。また、均衡理論のイメージと相違して、至って実証的で、意外にも「生産的労働」を理論解釈の中軸に据えている。これも評者著と触れ合うが、その付加価値論を不問に付することには不満が残る。そこで、各「話」ごとにその不満な論点も交えて、本書の全体構成を見ていきたい。

第二話「分業」は、原典の「序論」と第1編冒頭各章に即した各題目を的確に分かりやすくまとめている。とくに、「序論」冒頭部分を「経済学の目的」として最重要視することに、評者は同意する。また、分業による「収獲逡増」論を細胞分裂になぞらえて、「自立した各部門はしばらくは規模を拡大しつつ当該製品の市場占有率を高めていく…が、それが強力な独占企業に到る以前にさらなる細胞分裂が起こる」(63頁)と捉えて、独占化必然論を退ける。さらに、「生産

的労働」にこれほど注目した例(50, 113-14頁)は希少で、原典通りに読めばこうなる、という一例を示している。ただし、「不生産的労働」として「教師」を挙げるが、これはマルクス説との混同で、両説間のこの相違は後述の才能論にも関わってくる。

第三話「価格と競争」は、とくに、原典第1編第7章「商品の自然価格と市場価格について」の主題を詳細かつ明快に説く。ここは均衡理論の典拠個所だから、解説にも力がこもり、図らずも前掲中山著の衣鉢を継いでいる感がある。その上で、「自然率の解釈は難問」だとして、これを第四話に回す。また、スミスは「競争」概念について、価格を上・下させたりして「取引を有利に導こうとする、その動的なプロセスを競争と呼んでいる」。それに比べてワルラス等では、「競争は…その相手を欠いた、静的な状態を意味する特殊な言葉になって…いる」(95-96頁)。「スミスは…このセンスを…基本原理として磨き上げ」、その「見えざる手」を「最大の功績」(97-98頁)だと、本書は評価する。こうしてハイエクの完全競争(完全知識)論批判(→スミス評価)の妥当性を、ワルラス学者の著者は率直に認めて、前掲中山著の弱点を克服している。

ただし、「労働価値説?」(78-80頁)の題目部分には不満が残る。そこでは、「二財の交換比率は、直接・間接に、それぞれの生産に投下された労働量によって律せられるという命題」を「労働価値説」と規定し、「スミスの説は…決して(その)内容を含むものではない」、賃金・利潤・地代「を加算して価格が決まると主張する」のが、「常識家としてのスミスの議論の仕方」であるからと言う。これは、「スミスの説」が先の「命題」(リカードウ説)と異なるという意味でその通りだが、では、その「加算」を限定するものは何か? 本書が引用する、「価値を生産する」労働を「生産的と呼ぶ」(113-14頁)も、スミスのもう一つの「議論の仕方」ではないか?

原典によれば、第1編では、価格としての利潤(地代)は資本量(土地肥沃度等)に比例して決まり、第2編では、その利潤の源泉となる付加価値は「生産的労働」によって形成される。これは一種の分業(各部品)のような関係だと解される。その上で、第4編では、「見えざる手」の文脈等で、各編の理論(部品)をマクロ的に結合し、一体系(完成品)に仕上げている。この仕上げは、勤労(生産的労働)によって形成された総付加価値が純収入の総価格(賃金・利潤・地代)と同一のもの、という大前提に立脚している。この純収入が有効需要となって自然価格の運動(見えざる手)を規定する。評者には、これは一貫した論理だと思われる。ただ、本書はこの付加価値論を退けたわけではなく、「労働価値説の成立を許す条件は何々か——これは…また別の機会に論じたい」(80頁)として、含みを持たせている。そのため第五話でも、先の仕上げには触れずじまいだ。(岩波文庫訳(二)303頁1行「生産物」→「生産物の価値」)

第四話「成長」は、「曖昧な自然率の理解」のため、まず、原典第1編後半各章の「賃金論、利潤論、地代論」を解説する。とくに、地代論における価格構成説と高い価格の結果説との齟齬は、差額地代論によって克服されていると捉える。この理解に評者は同意するが、労働地代(→絶対地代)への言及はない。その上で原典第2編の「生産的労働」論を基軸にして、「スミスの社会会計」を記号式で解いていく。その際、「ヒックスの基本公式」(1965年)を受け止めつつその難点も指摘する。すなわちその「公式」では、「(生産的と不生産的の)ふたつの労働の比率

が成長率に与える効果はまったく触れられていません。また生産性がどのようなメカニズムで十分に伸びるのか——この点も不十分です」(124頁)。これらを踏まえてその「公式」を再構成し、次のように結ぶ。

粗貯蓄率  $s$ 、労働人口に占める生産的労働の割合  $\alpha$ 、また収穫逡増の度合を示す  $\theta$ ——これらのパラメータが、いわば経済の体質を具現するものです。…(その)体質と歴史的与件の下で、各変数の時間をつうじての挙動がすべて計算できる。この軌道に沿った賃金率  $w$  や利潤率  $r$  の値が、各時点での自然率である。(135頁)

この「収穫逡増の度合」の指摘は貴重だが、それは規模のメリット論である。これにより、諸記号式が張りめぐらされ、「自然率」をめぐる均衡理論成立の諸条件が満たされた。こうして、理論の一貫性が表式化されたように見える。これは苦心の成果だろうし、今後の研究の土台になりうるものだろう。その上でなお、次のような論点が残ると思われる。本書はスミス地代論を差額地代認識として捉えていた(112頁)。そうすると、その下での規模拡大はリカードウの危機意識(136頁)と同様に、その規模のメリットを損なう。現に原典第1編第11章の「結論」からは、その危惧の片鱗が窺える。その意味でスミスは、単なる規模(外延量)拡大だけでない方策を見据えていたはずだ。本書は、「自然な環境の許す範囲」、「自然な経済成長」(135頁)と言うだけで、いかにももの足りない。では、その活路の方策は何か? そのヒントが次の一文にある(本書に引用なし)。

年々の生産物の価値を増すには、その国の生産的労働者の数か、…その労働者の生産力かのいずれかを増す以外の方法は無い。(WN, II. 3. 32 / 前掲訳 131頁)

本書はこの「生産力」を「収穫逡増」として捉えたが、それは物量(外延量)増加で、「価値を増す」件は不明のまま。これは生産的能力(power)の価値(内包量→カント)の増加を含意しよう。この能力価値視点を導入しなければ、このスミスの立言も生かされない。その結果、文明の発展が諸科学・技術を駆使する才能の発達に負うことを捉え損ねてしまう。実際に、原典の「序論」や冒頭章末尾では、未開と文明の労働間における桁違いの才能格差を想定している(拙論『経済系』2014年7月号)。近年、藤本隆宏著(『日本のもの造り哲学』2004年、他)は設計思想の転写論(設計情報価値説)を提唱しており、これはスミスの才能視点を傍証しうる有力な新説のように思われる。

第五話は、原典第4編を採り上げ、昭和初期の高橋誠一郎著に依拠して重商主義の系譜を概観しつつ、スミス説の要点を紹介する。とくに、T. マンの貿易差額論の検討を踏まえ、その重商主義説が「自由主義」の一手手前であるのに、スミスはこれを「敵役」に仕立てたと結ぶ。そのため、本書も通説と同様に、第4編の「自由主義」の宝庫を閉ざしたまま。つまり、付加価値=純収入、貨幣の流通必要量説、国際分業→価値増加、商業への付加価値配分、独占貿易の非効率性、重農主義克服等は、研究史上、まともに解説されたことすら無い。この障壁が通説(価値

論放棄説)にあったわけで、これを払拭せずして、この宝庫に立ち入ることはできない。よって、これらを解説すれば、先の「敵役」の意味もかなり変わってくるはずだ。

要するに、ここでの自由貿易→国際分業は単なる物量増加だけでなく、「勤労 (industry)」能力の内包量増進による価値増加を主題としていた。遺憾ながら、本書はこの「勤労の増進」というヒューム由来の「常識」的な議論を不問に付している。ここに見られるスミスの「常識」とは、収入が豊かになるためには、それを支える価値生産が豊かにならなければならない、しかも、その外延量拡大に限度があれば、内包量増加を志向せざるをえないということに尽きる。

第六話「自然と科学」での題目は、「自然法、目的論、アリストテレース、デカルト、カント、ロック、天文学史、道徳感情」等で、スミスの「同感原理に規制された経済成長の向う究極的目的」が「静穏の美」にあったと結ばれる(231-32頁)。ここに著者の蘊蓄のほどが披瀝され、大いに興趣をそそられる。これに異論はないが、ただ、本書が見逃しているスミスの科学観には、「もっともかけ離れた…諸対象の諸力を結合できる」(WN, I. i. 9 / 岩波文庫訳(一) 33頁)もの、という観点がある。その上で、未開・文明間の貧富の懸隔を「結合できる」力の原理として、「労働だけが…究極的で真実の規準」(WN, I. v. 7 / 同訳 68頁)だとされる。これにより、「経済成長」の中身、つまり才能(内包量)増進→科学技術の高度化を促進し、「静穏の美」を保障する諸条件も明らかにされよう。なお、本書はスミス『道徳感情論』から、ある慣習的な審美説を引用・重視する(226-27頁)が、後でスミスはその説を退けている。同様の前例もあり、スミスの他説紹介の取扱いは要注意だ。

本書は近年の原典研究の進展を踏まえてか、第二～四話の理論分析では、上記の他、支配労働、技術進歩、市場認識、競争論などを新たな視点から捉え直し、従来の概説書の水準を超えている。確かに、本書は付加価値論や才能論を不問に付したままだが、その可能性を残している。地代論についても、あらぬ混迷から脱却したことは大きな前進だ。また、原典第3編、第5編の解説は省かれたが、財政規律への展望は理論分析に含蓄されている。全体として、従来の通説にさほど囚われず、「生産的労働」を重視・評価したことは、内外を問わず研究史上の一転回を画することだ。こうして、旧来の呪縛から脱却し、本来の前向きの議論に集中できるようになる。これらにより、知識・情報論を含むスミス付加価値論体系がさらに解明されることを期待してやまない。

(星野彰男：関東学院大学名誉教授)